令和3·4年度 静岡県教育委員会指定研究 令和2·3·4年度 御殿場市教育委員会指定研究

> GIGAスクール構想(1人1台端末)下における 『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善

研究主題

自ら課題を見つけ、主体的に解決する授業づくり ~ICTを活用した課題解決型学習の授業を通して~

発表要項



令和4年11月9日(水) 御殿場市立南中学校

指定研究発表会に寄せて

御殿場市教育委員会教育長 勝亦重夫

御殿場市教育委員会として、「ICT活用による授業改善」をテーマに、令和2年度から4年度まで3年間の研究を南中学校にお願いしました。また、あわせて令和3年度より、静岡県教育委員会 学力推進プロジェクト事業 GIGAスクール構想下における「『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善」調査研究事業にも取り組んでいただきました。研究の期間中は、新型コロナ感染症の波が何度か押し寄せ、研究推進の大きな障壁となりました。このような状況の中、横溝校長をはじめとして南中学校の教職員の皆様には、工夫を凝らし真摯に研究に取り組んでいただきました。また、県教育委員会からも研究に対して、手厚い御指導・御支援をいただきました。心より感謝いたします。

さて、デジタル庁の新設で象徴されるように社会全体がデジタル社会へと進んでおり、 日々その速度を増しています。本市においても、政府の打ち出したデジタル田園都市構想 を進めるために、市民生活の中のデジタル化・DX化を施策の柱として取り入れ力を入れて います。人工知能やビッグデータ、IoT等の先端技術は高度化し、あらゆる産業や社会生活 に取り入れられる時代が到来しようとしています。このような状況の中でICT教育を推進し、 子供たちに未来の社会を生き抜いていける力を育むことは、学校教育としての大きな責任 であると考えます。

御殿場市教育委員会では、平成30年に「教育情報化推進基本計画」を策定し、ICTを活用した教科指導の推進やICT環境整備の推進を行ってきました。今まで、電子黒板や児童・生徒用のタブレット端末の導入を順次進めてきましたが、予算等の課題もあり、十分に推進することができませんでした。しかし、新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、GIGAスクール構想の計画実施が前倒しとなり、昨年4月より念願だった一人一台タブレット端末の導入を実現することができました。これにより、学校におけるICT環境を飛躍的に向上させることができました。この好機を、子供たちの教育にどう生かしていくかが教育現場に問われています。

中学校では新学習指導要領が完全実施となり2年目を迎えています。変化が激しく先が 見通しにくい社会を、子供たちがたくましく生きていくための資質・能力を育むために、 「主体的・対話的で深い学び」となる授業を行うことが求められています。今までも継続 的に授業改善は行われてきましたが、授業者の発言が多く生徒が主体になっていない授業 がいまだに多くの中学校で行われているのも事実です。子供の学びの核となる授業を、も う一度「どのような資質・能力を育むか」という視点で捉え直し、質を向上させていくこ とが必要となります。一人一台タブレット端末の導入によって、今まで先生方が思ってい た「こんな授業にしたい」「こんな学びにしていきたい」といったことが実現できる状況と なってきました。発想を豊かにして様々なアプローチに挑戦していただきたいと思います。 タブレット端末の活用によって授業が変わり、子供たちが主体的に意欲を持って学ぶ姿が 増えることを期待します。

ごあいさつ

本日は御殿場市立南中学校の研究発表会への御参加、誠にありがとうございます。

本校では、令和2年度から今年度までの3年間、御殿場市教育委員会より指定を受け「ICT活用による授業改善」に、令和3年度からは静岡県教育委員会より指定を受け、GIGAスクール構想(1人1台端末)下における「『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善」調査研究事業に取り組んで参りました。

本研究を推進するにあたり、静岡大学教育学部准教授 塩田真吾様、静岡県教育委員会義務教育 課、静東教育事務所地域支援課、御殿場市教育委員会教育総務課・学校教育課、他多数の関係者の 皆様に、研究当初より多くの御示唆、御指導をいただき、本日の研究発表会を迎えることができま した。心より感謝申し上げます。

さて、昨年4月に1人1台のタブレット端末が急速に整備されて以降、本校では全職員が一丸となって知恵を出し合い、試行錯誤を繰り返し、よりよい活用に向けて研究を重ねて参りました。導入時は教員のスキルと活用頻度を上げることからのスタートでしたが、ICT ありきではなく個々の生徒の資質・能力の育成に資する活用をめざし、研究主題「自ら課題を見つけ、主体的に解決する授業づくり ~ICT を活用した課題解決型学習を通して~」を設定し、学習への内発的動機付けとなる『学習エンジン』をキーワードとした授業改善に取り組みました。「生徒の主体性を引き出す『発問』『学びの場』『教材・材料・資料』の工夫」「生徒自身による気付きや発見を促す授業者と生徒、生徒相互の対話と授業者による形成的評価」さらには「第2の学習エンジン、メタ認知へと繋げる適切な学びの振り返りと評価」の3つの要素を軸とした学びのサイクルの構築。そして、その中に効果的に ICT を組み込んでいくことにより、主体的・対話的で深い学びと個別最適な学びを実現しようと、相互授業参観と授業者へのフィードバックを柱とした研究を積み重ねて参りました。その成果をどのような形で発表したらよいかと悩みましたが、やはり授業者と生徒の姿で御覧い

その成果をどのような形で発表したらよいかと悩みましたが、やはり授業者と生徒の姿で御覧いただくことが一番であると考え、各学年2学級ずつの授業公開による研究発表会を実施することといたしました。先生方には、生徒の学びの中に『学習エンジンが働いている姿があったか』という視点で御覧いただき、忌憚のない御意見、御指導をいただけましたら幸いです。

本研究の実践を通して、組織として、また個々の教員も授業改善に対する意欲を高め、継続的な研究に協働して取り組めたことが何よりも大きな収穫であったと感じられます。

また、本校では朝の検温と健康観察、欠席連絡、通知や便りの配布、学校評価など各種アンケート調査の実施と集計など、学校運営に係る様々な面で ICT を活用し、業務のスリム化やペーパーレス化に取り組んでおります。学級閉鎖時等の学習保障、また、家庭学習も含めた個別最適な学びへの取組等にも ICT を活用し、ほとんどの教員がその技術を身に付けました。これも指定を受けて実践に取り組んできたからこその成果であると捉えています。

本研究への取組が、現行の学習指導要領、また、令和の日本型学校教育の深い理解とそこに求められている教育の実践へ、さらには教員の働き方改革へと繋がるよう、さらに研究を積んで参りたいと存じます。

令和4年11月9日

御殿場市立南中学校長 横溝 千都生

『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善 研究発表会 日程

1 日程

13:00 13:25 14:15 14:25 15:05 15:55 16:00

	研究授業	1h	全体会	助言・講演	
受	1年生 数学 音楽	移 動	・あいさつ	静岡大学	あい
付	2年生 理科 英語	休	・研究の概要	塩田真吾准教授	さ
'	3年生 国語 社会	休 憩	・指導・講評		つ

2 受 付

本校体育館にて行います。受付後、そのまま参観会場へ移動していただきます。 (授業前の全体会はありません。)

3 中心授業

1 0 1/2				
学年	教科	授業者	題材名	教室
1年	数学	齋藤 健介	いろいろな角度をつくってみよう	富士山ホール
1年	音楽	鈴木泉	秋のイメージを聴き手に伝わるように演奏しよう	第1・2 音楽室
2年	理科	加藤 恵利香	豆電球を明るくする要素は何?	第3理科室
2年	英語	鈴木 佑	Let's make an emergency manual to help foreign people	多目的室
3年	国語	渡辺 彩貴	おくのほそ道 (立石寺)	美術室
3年	社会	森口 智裕	模擬裁判をやってみよう	体育館

4 全体会

③ 研究の概要

① 開会の言葉 森 崇 御殿場市立南中学校 室伏 伸明 様 ② 静東教育事務所あいさつ 静東教育事務所所長

御殿場市立南中学校研修主任 静東教育事務所地域支援課教育主査 大村 竜一 様 ④ 指導・講評

静岡大学教育学部准教授 塩田 真吾 様 ⑤ 助言・講演

『授業での ICT をどう深め、広げていくか』

沢井 寿雄

⑥ お礼のあいさつ 御殿場市立南中学校校長 横溝 千都生

⑦ 閉会の言葉 御殿場市立南中学校 森崇

1 研究主題

自ら課題を見つけ、主体的に解決する授業づくり ~ICTを活用した課題解決型学習の授業を通して~

2 主題設定の理由

本校は、明るく優しい生徒が多い。校内では笑顔があふれ、仲間や教師と語り合う明るい声が広がり、落ち着いた雰囲気の中で授業が行われている。コロナ禍における授業形態の変化やGIGAスクール構想下の1人1台タブレットの導入による学習形態の多様化にも抵抗なく取り組み、現在は様々な場面でタブレット端末をはじめとしたICT機器が取り入れられた教育が実践されている。

昨年度実施された全国学力・学習状況調査の結果では、学習に対する意欲は高いものの、<u>基礎的・基本的な学力が定着しておらず</u>、<u>そそかしい生徒が多い</u>という実態が明確になるとともに、将来の夢や目標を持っている生徒が多いものの、<u>継続的に取り組む力が弱く、困難なことにも挑戦しようとする姿勢に乏しい</u>ということも明らかになった。他の項目からは、家庭での学習習慣が身に付いていなかったり、家庭でゲームやメディアに接する時間が非常に長かったりすることも分かり、基本的な生活習慣の乱れが顕著に表れていた。

このような現状をより良くするためには、まず教師が教える授業から子どもが学ぶ授業にシフトチェンジすることが必要であると考えた。その上で、さらに二つの視点から授業改善を進めることも必要である。一つは、「個々の生徒の学習に対する内発的動機付け(学習エンジンが働く授業)」を行い、もっと知りたいというさらなる問いを子どもたちが持つような学びを実現すること。もう一つは、ICTを効果的に活用したり、仲間と関わり合ったりする場を設け、「分かった」「できた」と子どもたちが実感するような深い学びを実現すること。以上のような取組を通して、生徒が主体的に学ぶ力を養っていきたいと考え、本研修主題を設定した。

3 目指す生徒像と研究仮説

目指す生徒像

- ・自ら課題を見つけ、主体的に解決する生徒。
- ・自らの考えを発信するとともに、仲間と関わりながら課題に取り組む生徒。

研究仮説

授業の中で意図的に課題解決型学習を行うことで、生徒が自らの意見を持ち、課題解決の過程で生まれる仲間との対話によって、学習の理解も深まり、目指す生徒像にせまることができるだろう。

4 研究内容

① 授業づくり

学習エンジンの働く授業を意識した授業づくり、授業実践により、「主体的・対話的で深い学び」 の実現に向けた具体的な実践方法を明らかにする。

② ICT活用の知見

授業および学校教育活動全般において、ICT(タブレット)を率先して活用し、効果的かつ効率的な活用の仕方について実証し、提言・発信していく。

本研究は令和2年度からの3か年の研究とする。

5 令和2年度の取組(1人1台タブレットの導入年度(本格導入は2月))

3か年の指定研究を受け、本校生徒の実態を把握し、**目指す生徒像を明確にする**ための取組を行った。また、**タブレットの本格導入に向けてタブレット活用研修**を実施した。

① 実態把握アンケート

生徒の授業等での様子を1学期間(約4か月)見たうえで、良い点や悪い点、目指す生徒像について教員にアンケート調査を実施した。調査結果をもとにして目指す生徒像を設定し、研究仮説、重点的に取り組む内容を決定した。

② 校内研修

- i 学年部によるタブレット活用研修、ロイロノート・Zoom活用研修
- ii タブレット活用提案授業

7月:学級活動『SNSにおけるコミュニケーションを見直そう』

9月:社会科 『裁判員制度の意義について考える』

※授業参観の視点は常に「授業づくり」と「ICT活用」の2点。





授業を参観した教員の感想

- ・導入時でのICTの活用は思いつくが、展開の中での活用方法が思い浮かばない…。
- ・ロイロの良さや、それを授業でどう活用できるかを<u>自己研修しないと活用が難しい</u>。でもこの授業を見て、使えるかもしれないというものは見つかった。
- ・自分の授業だったらどう活用できるかを考えながら参観していました。
- ・まだ自分が不慣れなため、ロイロはハードルが高く感じる。
- ・iPad は<u>準備や使い方の指導に時間がかかってしまいそうで使いづらい…</u>。やってみたいと 思うこともあるが、<u>結局従来通りのやり方</u>を選んでしまう。

③ 講演 静岡大学教育学部 塩田 真吾 准教授

『「ICTは便利!」を超えて、「ICTを使って、どんな力を育てるか」』

講演を聞いた教員の感想

- ・ICTに長けてなくてもいい。生徒にサポートしてもらってもよいのでは?という言葉で 気持ちが楽になった。
- ・ICTを単なる共有ツールではなく、思考を深めるためのツールとして使っていくことが 重要だと思った。
- ・問題を分析して課題を解決する生徒の育成、ICTを使って授業を構成する教師力が大切であると感じた。

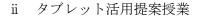
④ 校内授業公開(1授業公開·1授業参観)

6 令和3年度の取組(1人1台タブレットの本格導入年度)

「主体的・対話的で深い学び」を目指した**授業改善の継続**とともに、**全ての生徒・教員が気兼ねなくタブレットを活用した授業ができることを目標**に研修を行った。

① 校内研修

- i 教科研究チームでの「タブレット活用法」の作成
 - ・具体的な活用場面を想定することで、タブレットの操作を覚えた。
 - ・実践と検証を繰り返すことで、より良い活用場面や活用方法を追究した。



6月:道徳科『「思いやり」を考えることを通して』



② 講演 日本大学三島高等学校 大川 幸祐 教諭

『ロイロノートの活用について』

ロイロノート認定ティーチャーである大川教諭に来校いただき、 ロイロノートの有効性について話をしていただいた。

- ・『タブレットは文房具である』という認識を共有。
- ・課題の提出、提示の仕方、テスト機能等具体的な操作について。



③ 南中版「タブレット活用ステップアップシート」の作成

- ・全教員が、タブレットの基本的な操作を習得し、授業内外での活用につなげられるようにした。
- ・自身がどの程度活用できるのかを確認しながら、活用スキルアップにつなげた。

令和3年度末

ステップ゜1	ステップ 2	ステップ。3	ステップ゜4	
2人	1人	7人	11 人	
9 %	4 %	33%	52%	

(21人実施)

令和4年度7月末

	ステッフ゜1	ステッフ゜2	ステッフ゜3	ステッフ゜4
	0人	2人	1人	19 人
Ī	0 %	9 %	5 %	86%

(22 人実施)

④ 南中版「タブレット活用のルール」の作成

- ・タブレット本格導入に際して、使用上の約束や情報モラルについて規定し明文化した。
- ・生徒、保護者、教員に配布し共有した。

⑤ 校内授業参観日の実施(週1回ペースで相互参観)

令和2年度までの研修から、目指す生徒像に向けて以下の4点を意識した授業づくりを行った。

授業づくりで重点的に取り組むこと

- ① 生徒自ら課題を見つけられるような導入の工夫。
- ② 対話を生む発問や教材の工夫。
- ③ 深い追究と仲間との関わり合いを生む I C T の活用。
- ④ 生徒の振り返りを生かした授業改善。

⑥ 授業外でのタブレットの積極的活用

講演会をオンラインで実施するとともに、講演の際にはタブレット にてリアルタイムアンケートを行うなど、双方向型の講演を行った。

- ・タブレットを活用している授業を 参観し、自分の授業に生かした。
- ・互いの授業を参観することで、授業改善に生かした。



7 令和4年度の取組

これまでの2年間の取組や様々な研修会に参加した際の経験をふまえ、「主体的・対話的で深い学 び」を目指した**授業改善**のために、**『学習エンジン**』の考えを基にした授業づくり、授業実践を行うと ともに、効果的なタブレット活用法を意識した授業実践を繰り返した。

① 令和4年度の研修の方向性

【令和3年度まで】

【令和4年度】

ICT(タブレット)活用が主題 × 授業改善⇒主体的な学び ◎



- ·「ICTを使う/どのICTを使うか」から「ICTを使いこなす/どこでICTを使うか」へ。
- 「ICTを活用すること」が目的ではない。「ICTを使って、どんな力を育てるか」

<授業におけるICTの活用場面>

予想する

調べる

考える

かく (書く・描く)

記録する

ためす

共有する

交流する

まとめる

振り返る

- ・教員が授業力を高め、「主体的・対話的で深い学び」を実現し、生徒の資質・能力を育成する。
- ・基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させ、思考力・判断力・表現力等を育成する。
- ・探究的な学習や体験活動を通じ、生徒同士で、あるいは多様な他者と協働しながら、必要な資質・ 能力を育成する。一人ひとりの良い点や可能性を生かすことで、より良い学びを生み出す。

【タブレットに関して教員間で共有した授業でのイメージ…】



- ・タブレットのみで授業は成立しない。
- ・ICTで授業が劇的に変わることはない。
- ・ICTで学力が劇的に向上することはない。
- ICTで、今より分かりやすくする。
- ICTで、これまで埋もれていたものを 表に出す。

② 授業づくり・授業実践における重点ポイント

【令和3年度】前ページ⑤に記載



【令和4年度】より具体的に「学習エンジン」の考えを基にして…

- ・試行錯誤や自己決定の場が保証されるオープンな「学びの場」
- ・どの生徒にも何をするのかが明確で、なぜ? どうして? が内在し、わくわくする「発問」
- ・生徒の主体性を引き出し、多面・多様な情報の内在する「教材・教具」
- ・「個別最適な学び」や「協働的な学び」につながるICTの活用
- ・生徒の振り返りを生かした授業改善

令和4年度 御殿場市立南中学校研修構想図

校訓

進取と創造

生きる力

学校教育目標

しなやかでたくましく、 心豊かな南中生

自ら進んで物事をする **〈主体性〉**

新しいものを創り出す 〈自分や仲間の考え〉

生きて働く知識・技能 思考力・判断力・表現力 学びに向かう力・人間性 学びを人生や社会に生かそうとする

目指す生徒像

- ・自ら課題を見つけ、主体的に解決する生徒
- ・自らの考えを発信するとともに、 仲間と関わりながら課題に取り組む生徒

授業改善

もっと知りたい さらなる問い

『学習エンジン』のはたらく、魅力ある授業 ICT(タブレット)の効果的な活用

第2の学習エンジン

概念形成

発展·活用

有効な活用

ICT

有効な活用

ICT

個別最適な学び

協働的な学び

気付き・発見

双方向对話

生徒相互/教師と生徒

発問

「なぜ?どうして?ワクワク!」 簡単明瞭で分かりやすい 主体的な学び

教材•材料

生徒の主体性を引き出す 多面、多様な情報が内在する 対立、葛藤、変化、対比…

内発的動機付け

学習エンジン

試行錯誤、自己決定できる

学びの場

安心して学べる、オープンな場

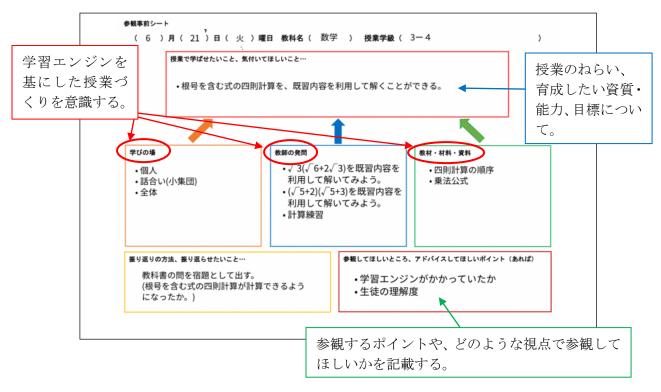
授業改善を進める学校体制

- ・全体研修の充実(提案授業公開、ICT活用研修、校内授業参観、生徒理解研修)
- ・ICT 活用のための校内環境整備・生徒と向き合う時間を確保するための業務改善の推進

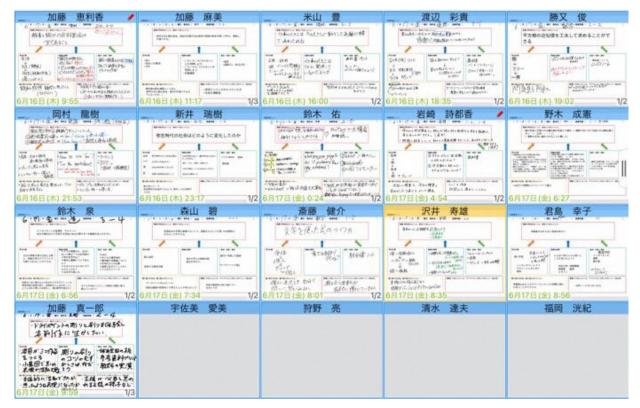
④ 校内授業参観日の充実

- ・平均週1回ペースで年間を通して実施する。研修部で指定した日に教員相互で授業参観を行う。
- ・参観の際には、事前に「参観事前シート」を見る。

参観事前シートはロイロノート内で作成し、提出箱に提出する。

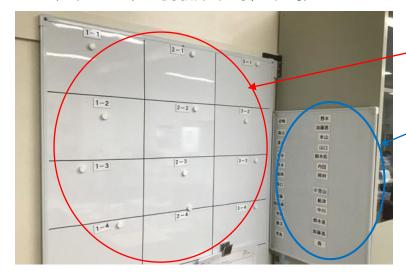


- ※ただ漠然と参観するのではなく、授業者のねらいや意図的な仕掛けについて事前に知っておくことで、より意味のある参観ができる。
- ※学習エンジンの概念に合わせて事前シートを作成することで、全教員が同じ方向性で授業づくりをすることができ、研修の充実につながる。



・タブレットを活用する授業が分かるように、職員室内にホワイトボードを設置し、活用する学級 を事前に記載する。

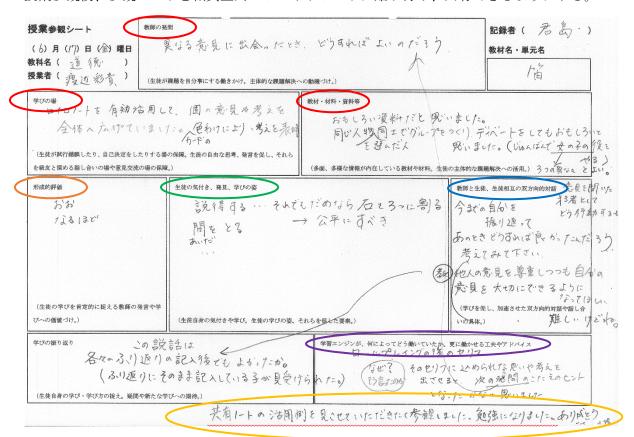
(必ずタブレットを使用する必要はない。)



授業参観後、授業参観シートを貼り付ける。研修主任が取りまとめ、 最後は授業者へ。

自分の氏名の横に、タブレットを 使用する授業のクラス名を記入す る。

・授業参観後、参観シートを職員室内のホワイトボードに貼り付け、共有できるようにする。



・「学習エンジン」の考えを基に授業参観を行う。

学びの場(学習形態)、発問、教材・材料について、何が行われ、その効果はどうだったのか。 形成的評価、教師と生徒、生徒相互の双方向的対話はどうだったか。

生徒の気付き、発見、学びの姿はどうだったか。ねらいにせまるものになっていたか。 学習エンジンが働いたきっかけや授業者へのアドバイスを記載。

参観したことで、タブレットの新たな活用法を知る機会になった。

8 研究の成果と課題

(1) 成果

① 授業においてタブレットを活用することが当たり前になった。

令和4年度全国学力・学習状況調査[生徒質問紙]より(対象:第3学年生徒、数値は全て%)

◎1、2年生の時に受けた授業で、タブレットなどのICT機器をどの程度使用しましたか。

	ほぼ毎日	週3回以上	週1回以上	月1以上	月1未満
本校	64. 9	25. 2	4.8	0.7	0.0
静岡県	29. 3	30. 5	27. 2	9.9	2.9
全国	21.6	29.3	29. 7	14. 2	5. 0

◎授業の調べる場面での使用

	ほぼ毎日	週3回以上	合計
本校	48. 3	40.8	89. 1
静岡県	18. 2	30. 5	48. 7
全国	12. 3	24. 9	37. 2

◎授業の意見交換の場面での使用

	ほぼ毎日	週3回以上	合計
本校	36. 1	41. 5	77. 6
静岡県	7. 4	17. 5	24. 9
全国	5. 0	12.8	17.8

◎授業のまとめ・発表の場面での使用

	ほぼ毎日	週3回以上	合計
本校	25. 9	48.3	74. 2
静岡県	6. 3	13. 2	19. 5
全国	4. 7	10. 3	15. 0

- ・本校では、日常的に授業のあらゆる場面において**タブレットが抵抗なく活用**されていた。
- ・特定の教員だけでなく、**あらゆる教員が授業** でタブレットを活用していた。
- ② 生徒は授業において、**タブレットを文房具の一つとして活用し、その結果、理解度が上がり、 学習が深まったと実感**している。

タブレット活用アンケートより (対象:全校生徒、実施:1学期末、数値は全て%)

◎授業中にタブレットを活用する際、操作に不安はありますか。

	まったくない	ほとんどない	少しある	ある
1 学年	62. 3	28. 1	9. 6	0.0
2 学年	47. 6	36. 1	13. 0	3. 2
3 学年	60.6	33. 4	4. 1	0.7
全校	89	. 6	10	. 4

- ・操作が苦手な生徒を把握していれば、教員や仲間のフォローを受けやすく、良化が見込める。
- ◎授業でタブレットを活用することで、理解度が上がり、学習が深まっていると思いますか。

	とても思う	ある程度思う	あまり思わない	まったく思わない
1 学年	62. 2	33. 3	3. 5	0.8
2 学年	40. 3	53. 2	5. 6	0.8
3 学年	50. 3	46. 3	1.4	0.6
全校	95	. 3		4. 7

- ○画面共有で、より詳しく内容を理解することができた。
- ○先生の画面配信による解説で理解度が上がった。
- ○共有ノートを使用することで、グループの意見を簡単にまとめることができた。
- ▲タブレットだとノートのように自由にまとめられず、復習に使用するのに不便だった。

③ 授業改善とタブレット活用が、生徒の学習意欲を高めることにつながっていた。

令和4年度全国学力・学習状況調査「生徒質問紙」より(対象:第3学年生徒、数値は全て%)

◎ 1、 2 年生の時に受けた授業では、課題の解決に向けて、自分で考え自分から取り組んでいましたか。

	当てはまる	どちらかといえ ば当てはまる	合計
本校	36. 7	50.3	87. 0
静岡県	29. 9	49.5	79. 4
全国	31.2	48.0	79. 2

・授業改善に向けて継続的に取り組んで きた結果、生徒の主体的に学び、課題を 解決しようとする姿勢の育成につなが っていた。

◎自分と違う意見について考えるのは楽しいと思いますか。

	当てはまる	どちらかといえ ば当てはまる	合計
本校	41.5	47.6	89. 1
静岡県	31.8	46. 9	78. 7
全国	31. 4	45. 5	76. 9

- ・タブレットの活用により、今まで埋もれていた多様な意見が出されたことで、深い学びにつながっていた。
- ・年度当初に共有したタブレット活用の 授業イメージが実現化した。

④ ほぼ全ての教員が授業や学校生活のあらゆる場面でタブレットを活用している。

(令和3年度末の20人規模の人事異動があったにも関わらず)

- ○「南中版タブレット活用ステップアップシート」による現状把握と、付けたいスキルの明確化 ができた。
- 校内授業参観の実施により、タブレットを活用している教員が手本となっていた。
- 生徒がタブレットの操作方法や活用スキルを身に付けているため、教員のサポートができた。

学校でのICT・タブレットの活用例(一部)

- ・生徒の欠席連絡受付 ・生徒、保護者へのアンケート、お便りのペーパーレス化
- ・学年行事のしおりのペーパーレス化 ・学級閉鎖、出席停止生徒への遠隔授業
- ・係活動(学校祭の係別活動時) ・学級での話し合い活動(ロイロノート共有ノート)
- ・部活動での連絡、ミーティング等 ・委員会活動 (ポスター制作、テスト予想問題作成)
- ・昼の校内放送(生徒会本部による動画撮影、編集)

⑤ 教員の『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善への意識が高まった。

◎研修を通して、授業改善への意識が高まりましたか。(対象:全教員、数値は%)

	当てはまる	やや当てはまる	あまり当てはまらない	当てはまらない
該当者	78. 3	21. 7	0	0

- 授業は常にアップデートしているが、タブレットの有効活用、効率化を研修している。
- 校内研修を受けて、学習エンジン、ICT活用という視点で単元構想を意識するようになった。教員の意識を変える必要があることを常々意識している。
- ○「学習エンジン」という言葉を意識して教材研究するようになった。校内授業参観によって先 生方の授業から学びを得られた。
- これまでは授業者の説明等を十分にしなければならないと感じていたが、タブレット活用や 生徒の対話を意識して授業をつくることを意識した。

(2)課題

- ① **授業においてタブレットを活用することが、学力の向上につながっているのか**については、今 後更に検証していく必要がある。
 - ▲令和4年度全国学力・学習状況調査の3教科の結果が、全国や静岡県と比較すると低い数値になっている。また、国語における漢字の書き取りや、数学の素因数分解などの単純な問題については正答率が高いものの、<u>読解が必要な問題や複雑な思考を伴う問題、記述式の問題などでの正答率が低く</u>、本校生徒の特徴が顕著に表れた結果となった。
- ② 学校生活の中のあらゆる場面でタブレットを活用しているにも関わらず、**家庭学習の際に活用** できていない。

タブレット活用アンケートより (対象:全校生徒、実施:1学期末、数値は全て%)

◎家庭学習の際にタブレットを活用していますか。

	ほぼ常にする	ときどきする	あまりしない	まったくしない
1 学年	0.8	41. 2	46. 5	10.5
2 学年	4. 1	42. 7	36. 3	14. 5
3 学年	5. 4	28. 6	37. 4	26. 5
全校	40. 5		59. 5	

- ▲学年が上がるにつれて、家庭学習でのタブレット活用ができていない。<u>学校での学習では当たり前に活用しているのに、家庭学習で活用していない</u>のはなぜかを検証していく必要がある。 家庭学習においてもタブレットを有効活用できれば、学力の向上が見込めるのではないか。
- ▲<u>生徒が自身の学びを調整するために</u>、タブレット内に保存されている授業で使用したファイル等がきちんと<u>整理されている</u>のか、<u>学習の積み重ねが分かる</u>ようになっているのか等、教科で十分に指導していく必要がある。
- ③ 情報モラル、メディアリテラシーなど、生徒を取り巻くメディア環境を整える必要性。

本校に限ったことではないが、生徒たちは1日の中の多くの時間でメディアに触れている。便利であると同時に、様々なトラブルも同時に起こっているのも事実である。日常生活に欠かせないものになっているからこそ、今後、学校や家庭において<u>情報モラルを養い、メディアリテラシーを高める教育を同時進行で行っていくことの重要性を強く感じている。</u>

※アンケートの御協力のお願い

これまでの研修の反省と、今後の参考にさせていただきたいと思いますので、今回の研究発表会 について御回答いただきたいです。下の二次元コードを読み取っていただき、発表会後1週間以内 を目途に実施していただければと思います。お手数ですが、何卒よろしくお願いします。

